

聖書：マタイ 11：27～30

説教題：たましいに安らぎを

日時：2019年5月19日（朝拝）

先週は25節のイエス様の賛美のお言葉を見ました。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。」イエス様が言っていることは、知恵ある者や賢い者が福音を拒否して神の国に入れなくなる一方、幼子たちがこれを素直に受け入れ、天国に入る者になるということ。これはもちろん頭の良い人は自動的に天国に入れないとか、キリスト教は人間の知性に敵対的であるということではありません。これは自らを知恵ある者とか賢い者と自負する人は往々にしてそのプライドによって福音を退ける。神はさばきとしてその人に真理を隠す。一方、幼子たちとは自らを知恵ある者とは誇らず、むしろ幼子のような者にとらえて、神が差し出す恵みの手にすがる人のこと。その人に神はご自身と御国の素晴らしさを現してください。これが神の方法です。ですから私たちとしては、幼子のような者にならなくてはならないということになります。18章3節：「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。」

さて神が幼子たちに現すという時、それは直接的にそうなるのではないというのが27節です。ここには父なる神と御子イエス様の一体性が示されています。イエス様を知っているのは父なる神の他にはない。父なる神こそがイエス様を誰よりも深く完全に知っている。その反対も然りです。子の他に父を知っている者はない。父なる神のことを誰よりも深く完全に知っているのは御子イエス様です。しかしこの後半には前半にはない言葉が付け加えられています。それは父なる神を知るのは御子イエス様だけでなく、「子が父を現そうと心に定めた者」もであるということです。これは何を言っているのでしょうか。それは父なる神を知る唯一の道は御子イエス・キリストであるということです。父はご自分に関する真理を幼子たちに現してくださいますが、それは御子イエス様を通してである。これが父なる神を知る唯一のチャンネルであるということです。

このことに基づいて28節以降の「わたしのもとに来なさい」というイエス様のアピ

ールがあります。父なる神を知る道はイエス様を通してしかない。そのイエス様が「わたしのもとに来なさい！」とアピールしている。しかもすべての人に向かって。このイエス様の招きに聞いて、イエス様のもとに行く人たちが幼子たちであり、その人たちに神はご自分とその真理を現される。一方、このイエス様の招きを退ける人は、25 節が言うところの「知恵ある者」「賢い者」であり、その人たちには神の国の真理が隠されるということなのです。

さてその 28 節。多くの教会の看板や教会案内に、この御言葉が記されています。この中の特にどこに私たちは引き付けられるでしょうか。それは「休ませてあげます」という部分ではないでしょうか。これは言い換えれば、私たちは本当の休みを必要としているということです。あるいは自分は休めていないと感じている人が多い。むしろ疲れている。重荷を負っている状態にある。何とかそこからリフレッシュしたいと考えているが、そうできていない。そんな私たちはどうやったら自分を休ませることができるのでしょうか。ある人は旅行に行くことによってと思うかもしれませんが。ある人は美味しい食事をするによって。ある人は自分の趣味に没頭する時間を持つことによって。ある人はショッピングに出かけることによって。またある人は何もしないで家でごろ寝をすることによって、と。しかし私たちは、これらは一時的な解決にしかないことを知っています。それに対してイエス様が与えてくださるのは本当の意味での休み、根本的な休みです。それはどういうものなのでしょうか。それは 27 節との関連に注目する時に見えて来ます。27 節では、イエス様こそ神を知るための唯一の道だと示されました。つまりイエス様が与えてくださる休みとは、イエス様を通して父なる神を知ることと関係していることが分かります。実に私たち人間の真の休み、リフレッシュは、神を知り、神と交わる生活にあるということです。反対から言えば、私たちは神から離れて生きているため、本当の休み、心からの休みを得ることができないでいる。そのために疲れて重荷を負った人となってうめいている。

私たちは神とは違う何かで自分を満たして、自分を元気づけ、奮い立たせようとしています。ある人はお金を沢山蓄えて自分を安心させ、慰めを得ようとしています。ある人は新しい製品を次々に買い求めることによって自分を元気にしようとしています。ある人は名誉や地位を得ることによって自尊心を保ち、喜びを得ようとしています。ある人は友達をた

くさん作り、多くの人とのつながることによって、自分は友達が多い人間だという自負心と心の支えを持つとします。しかしこういったことを過度に追い求めるあまり、逆に自分自身を忙しくし、心身をすり減らし、疲れている者、重荷を負っている者にしてしまっていることはないでしょうか。しかし人間は実は造り主なる神を知り、神と交わって生きるところに、本当の休みを見出す者として造られているというのが聖書のメッセージです。アウグスティヌス人は『告白』の中で神に向かってこう告白しました。「あなたは、わたしたちをあなたに向けて造られ、わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじないからである」と。イエス様が与えてくださる休みとは、まさにこういう種類のものです。私たちに神を知らせ、神との正しい関係へ導くことによって、私たち人間に最も必要な根本的な休み、真の休息を与えてくださるのです。

ではイエス様のもとに行くとは具体的にはどうすることでしょうか。それが 29 節にあります。それはイエス様のくびきを負って、イエス様から学ぶことです。一言で言えばイエス様と弟子関係になることです。ここに「くびき」という言葉が出て来ます。くびきとは家畜の首にかけて、荷車を引いたり、畑を耕したり、家畜を目的地に向かって歩ませるための道具です。そのため、ある人々は不自由なもの、束縛するものといった否定的なイメージを持つかもしれません。しかしくびきは本来、家畜を助けるためのものです。それがあってによって、すべての力がそこにかかって効率よく働けるようになる。確かに 2 頭がバラバラの方向に頑なに進もうとするなら、それは恐ろしい道具にもなるでしょう。しかしここで言われている相手はイエス様です。イエス様とくびきをともにし、イエス様と一緒に歩みながら、イエス様から学ぶ生活は違います。むしろその人はそれによってたましいに安らぎを得ると言われています。なぜでしょうか。それはイエス様が柔和でへりくだっている方だからです。普通、先生と弟子の関係では先生が上です。上から目線で色々指導されても文句は言えません。しかしイエス様は違います。例えばテニスや卓球、バドミントンなどダブルスを組むスポーツのことを考えてみてください。その際、どんな人とパートナーになるかは大きな問題です。もし相手の人が厳し過ぎる人、勝手に動く人だったら大変です。ミスをするたびに睨むような目で見てきたり、大きなため息を漏らされたりしては、そのくびきから早く解かれたいとも思うでしょう。あるいは誰かと仕事を一緒にする時もそうです。いかに能力がある人でも、その人が威張っていて自己顕示欲の強い人だと私たちは一緒に仕事をするのが嫌にな

ってしまいます。しかし本当にへりくだった人と仕事をしたり、奉仕したりすると、救われる気持ちになることがあります。その人格に触れて心に喜びが沸き起こり、励まされる。とするならイエス様とペアの歩みはなおさらそうなのではないでしょうか。イエス様は「心が柔和でへりくだっている」と言われています。心において、すなわちその存在の中心においてへりくだっている。イエス様は天の栄光の王座を捨てて、私たちのところまでご自分を無にして下って来てくださったお方です。見せかけだけの謙遜ではありません。真にへりくだったお方です。そのイエス様とともに歩む中で、私たちは神について教えられます。また神の愛を体験させられます。また神の御心をわきまえ知り、その道に歩む喜びとすがすがしさを経験します。そしてさらにイエス様は私たちを愛して、その尊いご自分の命までも十字架の上に投げ出してくださいました。「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」 このお方とくびきをともにして、私たちが害を受けるということなどあり得ません。むしろ私たちの人生は変えられずにいないでしょう。そのお方の大きな愛に触れて、私たちの固く閉じていた心、冷え切っていた心は溶かされずにいません。そしてこのイエス様の身代わりの犠牲を通して、神の前にある私たちの罪はすべて赦されます。私たちはそこに真の休み、深いたましいの安らぎを得るのです。消したくても消すことのできない様々な過去の罪が神の前ですべて赦される。そして今や神に受け入れられ、愛されている者として、永遠のいのちへ向かう歩みをすることができる。そのようにして私たちの造り主なる神と生きてつながって歩むところに、それまでの私たちが知らなかった真のリフレッシュと日々新たに力を注がれる歩みが導かれるのです。

最後の 30 節でイエス様はこう付け加えられました。「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」 イエス様がくださる休みとは、ここからも分かりますように、何もしないという意味の休みではなく、イエス様のくびきを負い、イエス様に従う生活と両立するものです。イエス様のくびきを負う生活は、むしろレベルが高いことをこれまでも見て来ました。5 章 20 節：「わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」 当時最も宗教的だと思われた律法学者やパリサイ人以上でなければならぬとしたら、一体誰にそれが可能かと思われるところです。にもかかわらず、そのくびきは負いやすく、その荷は軽いと言われている。どうしてそうなのでしょう。

その理由の一つは私たちの動機が変わって来るからです。同じ仕事をするにも、喜んでするか文句を言いながら義務感からするかでは全く変わって来ます。Iヨハネ5章3節：「神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。」 またこのくびきが負いやすく、その荷が軽いのは、イエス様がともに歩んで助けてくださるからです。その意味はイエス様が多くを負ってくださって私たちのすることが少なくなるという意味ではありません。イエス様の要求は先程から見ているように高いものです。しかしイエス様は十字架と復活を通して勝ち取られた聖霊の恵みによって私たちを強くしてくださいます。私たちはその新しい力を注がれて事に当たるため、それはつらいことや重荷ではなくなる。そしてもう一つ、このくびきが負いやすく、その荷が軽いのは、私たちがイエス様に導かれて人間としての正しい道に歩むからです。私たちは神から離れて自分の好き勝手な道に歩んでいる時、それは自由だと思っているのですが、実は的が外れたところに多くのエネルギーが向けられているため、逆に疲れてしまっている。ピン트가ずれているために、結果として無駄に疲れを増し加えている。しかしイエス様を通して神の御心にかなう道に歩む時、それはつらいことではなく、むしろ心地良いものとなるのです。箴言3章17節：「知恵の道は楽しい道。その通り道はみな平安である。」

私たちはこのようなお方に、自分の人生を導いていただきたいとは思わないでしょうか。イエス様はすべての人に、「疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。」と言っておられます。イエス様はその人と一緒に歩いてくださり、同じくびきを負って、その歩みを助け導いてくださいます。その方は心において柔和でへりくだっている方。ご自身のいのちをささげるほど私たちを愛してくださるお方。そして私たちに、神を知る真の休みと、その幸いな歩みへ導いてくださいます。私たちは神の御前における幼子として、このイエス様の招きに聞いて、イエス様のもとに行きたいと思いません。そしてたましいの安らぎを得て、神との正しい関係の内に、御心にかなう道を行く人間本来の祝福の道に歩む幸いへ導かれたいと思います。